

岐阜県の爬虫類：ニホンイシガメの危機と保全

楠田 哲士

(岐阜大学応用生物科学部／附属野生動物管理学研究センター)

ニホンイシガメは、2012年の環境省レッドリスト改訂により「準絶滅危惧」に引き上げられ、これを機に本種に注目が集まるようになった。2013年のワシントン条約附属書の見直しでは、アジア産のイシガメ科15種が附属書Ⅱに掲載され、ここに含まれたニホンイシガメも初めて輸出規制の対象になった。附属書Ⅱ掲載種は、商業取引は可能であるが、輸出国の許可書等が必要になるため、2013年8月以降の輸出状況を把握できるようになった。環境省の資料によれば、2015年3月以降、ニホンイシガメの輸出申請件数・個体数が急増し、2013年8月～2015年9月に約28,000個体が輸出され、約9割が野生捕獲個体（残りが飼育下繁殖個体）であることが明らかにされた。その捕獲地は、愛知県が最多で、静岡県・千葉県・三重県・岐阜県の順に多く、特に東海地方で局所的な絶滅が起こりうる事が危惧されている。

岐阜県では、県（2015年）と岐阜市（2015年）のレッドリストにおいて、ニホンイシガメはともに準絶滅危惧と評価されている。私たちは2010年から市内のカメ類の捕獲調査を続けているが、圧倒的に外来種のミシシippアカミミガメが多く、次いでクサガメ（近年、外来種と考えられている）が多い。これまでの約20年間の集計では、この2種が約85%を占め、ニホンイシガメは12%であった。市内全域調査の2009～2013年と、その約10年後の2019～2021年の結果を比較すると、1) 元々北部に大きく偏っていたニホンイシガメの分布域が激減、2) 市の南部でアカミミガメの割合が激増していることが明らかになった。ニホンイシガメは、国（環境省）の保護増殖事業対象種ではないが、地域的には絶滅の危険性が高まっている。現在、岐阜市版レッドリストの改訂作業を行っているが、絶滅危険ランクを上げざるを得ないと考えている。市内の個体群の絶滅回避のため、岐阜大学構内に淡水生物園（カメの池）を造成し、半自然下での繁殖を進めている。

外来種の拡大も深刻であるが、岐阜大学周辺ではアカミミガメの継続的な駆除により減少傾向にある。県内ではカミツキガメやワニガメも発見されている。2022年10月には市内の川沿いの畑で、ついにカミツキガメの孵化幼体まで発見され、繁殖していることがわかってきた。外来種対策と在来種保全を、行政・市民等と一体となって継続できる体制構築が急がれる。

講演者プロフィール

兵庫県神戸市生まれ。日本大学生物資源科学部卒業、岐阜大学大学院修了、博士（農学）。現在、岐阜大学応用生物科学部准教授（動物繁殖学研究室）、日本動物園水族館協会生物多様性委員会 外部委員。専門は動物保全繁殖学・動物園学。動物園・水族館の希少動物や野生のカメの繁殖研究と保全活動を行う。主著に『岐阜県の動物—哺乳類・爬虫類・両生類・十脚類』、『神の鳥ライチョウの生態と保全—日本の宝を未来へつなぐ』、『日本のいきものビジュアルガイド はっけん！ニホンイシガメ』、『動物園学入門』など。